

## 朱色と日本人

中央図書館学生センター 収書・整理課  
西野結華

2022年12月より中央図書館学生センターの収書・整理課にて勤務しております。図書館で勤務するのは初めてのことで、最初は不安もありましたが、周りの方々に支えられて日々業務をこなしております。

先日、神社に訪れる機会があり、境内を見て回っていたところ、青い空と自然の緑に鳥居の朱色が映えていたのがとてもきれいで非常に印象に残りました。



箱根神社

ふと、なぜ神社の鳥居は朱色なのだろうと疑問に思い調べてみることにしました。今の時代、ネットで検索をすれば数秒で答えが見つかりますが、香散見草を書くにあたり、あえて大学生のころのように図書館で関連していそうな本から探すことにしました。大学生のころは、レポートの課題や通学中の読書のために頻繁に図書館に通っていましたが、社会人になってすっかり本を読む習慣がなくなっていたので、良い機会になりました。

結論から言うと、鳥居に朱色が使用される明確な答えはありません。朱色でなく、檜原神宮のようにそのまま木が使われている鳥居や御金神社のように金色の鳥居もあります。

しかし、朱色が使用される理由には、大きく3つの説がありました。1つ目は、古墳時代



右：御金神社 左：檜原神宮

に石室や石棺に朱で鎮魂と魔除けの文様が描かれていたこともあり、魔力に対抗する色としての呪術的な意味が理由だとする説。2つ目は木材の防腐剤として朱色の塗料である丹が使われたという説。3つ目は中国などの大陸系の丹塗り建築が持ち込まれたという説でした。

朱砂または辰砂と呼ばれる水銀と硫黄の化合物の古代の産地は、青森県から鹿児島県まで全国的に分布していて、日本では縄文時代から土器や土偶に朱が塗られていました。

現代の感覚では、朱色は黄色味が強い赤色というイメージがありますが、朱はもともと純粋な赤色でした。なぜ朱色は黄色味が強い赤色だとイメージするようになったのでしょうか。それは、のちに登場した黄色味が強く、鉛丹や丹と呼ばれる鉛系の赤が朱色の代用品として使用され、普及したからです。

また、奈良の枕詞である「青丹よし」の丹はこの朱色のことを指しています。その枕詞を用いた歌では、青や赤に塗られた建造物がある奈良の町のことが歌われており、朱色が日本人にとって古代から身近な色であったことがわかりました。

朱色と鳥居の関係については諸説ありますが、古代から日本人が朱色を使用していたことからどの説も間違いではないのだと思います。ネットではなく、本から朱色に関連される事柄を調べたことで、推測される他の説や朱色に関する情報が得られ、より知識が深まったと感じます。

まだまだ至らない点もあるかと存じますが、精一杯努めてまいりますので今後ともよろしく願いいたします。

参考文献

谷田博幸 (2014), 『鳥居』, 河出書房新社, 222頁。

松田寿男 (2005), 『古代の朱』, ちくま学芸文庫,  
277頁。

武井邦彦 (1973), 『日本色彩事典』, 笠間書院,  
189頁。